詩語「風箏」について

名畑嘉則

はじめに

「箏」の字そのものは「琴」に似てやや大型の楽器(日本でいう「こと」)を指すが、これに「風」字を加えて「風箏(feng zheng)」とすると、現代中国語では、日本語でいう「いかのぼり」すなわち「凧」を指す語となる。ところが、実はこの「風箏」の語は、中国の古い詩文の中にも登場しており、そこでは「凧」とは違った物を表しているように見える。一例を挙げてみよう。

風箏吹玉柱、露井凍銀床。

右は杜甫「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」詩に見える句である。この詩は『唐詩選』にも採られているから、最も日本人の目に触れやすい用例の一つと言えよう。この句の「風箏」に対する日本人による種々の解釈書を見ると、おおむね、「風鈴の類」と解するもの、「箏を社殿の隅に懸け風が通れば鳴るのをいう」と解するものに二分される。[一] ただし、解釈の根拠を明示した例はなく、各家の解説を見る限り、いずれの解釈に軍配を挙げるべきかは判然としない。[二]

採用の根拠は明示されないものの、これらの解にも実は基づくものがあって、「風鈴」と解する説は明の楊慎『丹鉛総録』によって世に知られ、一方、「懸けた箏」と解する説は上引杜甫詩に対する宋代の注釈に見える。ちなみに『大漢和辞典』は「風箏」の項に「いかのぼり」・「ふうりん」の二義を掲げ、この杜甫詩を後者の用例として引くが、これは楊慎の解を採用したものであろう(ただし『丹鉛総録』の説は引かれない)。

さて、このように、上引の杜甫詩の解釈について「風鈴」「懸掛した箏」の二説が行われているわけであるが、本稿の主題はいずれの解が妥当であるかを検証することには存しない。というのも、この問題に関しては、中安真理「仏教建築荘厳具としての絃楽器について―箜篌と風箏を中心に―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』48輯・第三分冊、二〇〇二年度)において既に決着を見ていると認められるからである。該論文は、わが国の正倉院文書等に記述される仏教建築の荘厳具(装飾具)としての楽器「箜篌」について、それが従来理解されていた「竪箜篌」(縦型ハープ)ではなく「臥箜篌」(横型長胴ツィター)である可能性について論証したものであるが、その一環として中国の「風箏」に言及し、それが箜篌と同様に仏教建築等の荘厳具として簷の下に懸掛された箏

であることを、上引の杜甫の詩句や郭知達の注などを挙げつつ指摘している。わが国で箜篌を建築の荘厳具として使用した明証が存在すること、絃楽器を建築の荘厳具とする風習がわが国で独自に創案されたとは考えにくく、中国に由来するものと推測されること等を踏まえれば、中国における「風箏」が建築物の荘厳具として懸掛された箏を指すと見ることの妥当性は極めて高いと考えられる。

問題は、こうした箏を簷下に懸掛する「風箏」の風習が、どのように忘れ去られ、やがては風鈴を指すとの誤解を生み、さらに「凧」を指す語に転じて行ったかという経緯の解明に在る。中安論文はこの問題について「別の機会に詳述したい」と述べているが、管見の限り、その後、氏による詳細な論考は公表されていないようである。以下、筆者の知りえた範囲でこの問題について些かの報告を試みる所以である。(三)

一　唐詩の中の「風箏」

「文淵閣四庫全書電子版」を用いて「風箏」の語を検索するに、唐以前の文献には用例が検出されないから、唐代になって定着した用語かと想像される。そこでまず、「風箏」が「懸掛された箏」を指すことの確認を兼ねて、唐詩における用例を左に一覧しておきたい。(各詩の後の括弧内は『全唐詩』の収録巻および作者・詩題)

①晨登瓦官閣、極眺金陵城。鐘山対北戸、淮水入南栄。漫漫雨花落、嘈嘈天楽鳴。両廊振法鼓、四角吟風箏。杳出霄漢上、仰攀日月行。…(後略)(一八〇、李白「登瓦官閣」)

②(前略)…翠柏深留景、紅梨迥得霜。風箏吹玉柱、露井凍銀床。身退卑周室、経伝拱漢皇。谷神如不死、養拙更何郷。(二二四、杜甫「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」)

③高風吹玉柱、万籟忽斉飄。颯樹遅難度、縈空細漸銷。松泉鹿門夜、笙鶴洛浜朝。坐与真僧聴、支頤向寂寥。(二九二、司空曙「風箏」)

④風箏吟秋空、不肖指爪声。高人霊府間、律呂伴咸英。昔年与兄遊、文似馬長卿。今来寄新詩、乃類陶淵明。…(後略)(三五五、劉禹錫「酬湖州崔郎中見寄」)

⑤連昌宮中満宮竹、歳久無人森似束。…(中略)…舞榭欹傾基尚在、文窓窈窕紗猶緑。塵埋粉壁旧花鈿、烏啄風箏碎珠玉。上皇偏愛臨砌花、依然御榻臨階斜。…(後略)(四一九、元稹「連昌宮詞」)

⑥何響与天通、瑤箏挂望中。彩弦非触指、錦瑟忽聞風。雁柱虚連勢、鸞歌且墜空。夜和霜撃磬、晴引鳳帰桐。幽咽誰生怨、清冷自匪躬。秦姫収宝匣、搔手不成功。(四八六、鮑溶「風箏」)

⑦月浪衝天天宇湿、涼蟾落尽疏星入。雲屏不動掩孤嚬、西楼一夜風箏急。欲織相思花寄遠、終日相思卻相怨。但聞北斗声迴環、不見長河水清浅。金魚鎖断紅桂春、古時塵満鴛鴦茵。堪悲小苑作長道、玉樹未憐亡国人。瑤琴愔愔蔵楚弄、越羅

冷薄金泥重。簾鉤鸚鵡夜驚霜、喚起南雲繞雲夢。双璫丁丁聯尺素、内記湘川相識処。歌唇一世銜雨看、可惜馨香手中故。（五四一、李商隠「燕台詩（其三）」）

⑧夜静弦声響碧空、宮商信任往来風。依稀似曲才堪聴、又被移将別調中。（五九八、高駢（こうべん）「風箏」）

⑨梨花満院飄香雪、高楼夜静風箏咽。斜月照簾帷、憶君和夢稀。小窓燈影背、燕語驚愁態。屏掩断香飛、行雲山外帰。繡簾高軸臨塘看、雨翻荷芰真珠散。残暑晩初涼、軽風渡水香。無憀悲往事、争那牽情思。光影暗相催、等閒秋又来。天含残碧融春色、五陵薄倖無消息。尽日掩朱門、離愁暗断魂。鶯啼芳樹暖、燕払回塘満。寂寞対屏山、相思酔夢間。（八九五、毛熙震「菩薩蛮」）

以上、都合九首を数える。[七] これらの「風箏」について、「風鈴」や「凧」と捉えることの不都合、および「懸掛された箏」と捉えることの利点を指摘してみよう。[八]

まず①李白詩には「四角に風箏吟ず」とあり、「風箏」が音を立てるものであることが詠われる。後述のように「凧」としての「風箏」が元来音を立てるものを指したにせよ、「四角」すなわち楼閣の四隅で同時に凧揚げをするというのはかなり異様であろう。また⑤元稹詩は荒廃した連昌宮を詠ったもので、「烏は風箏を啄（ついば）みて珠玉を砕く」とあるが、金属製の「風鈴」であれば、鳥がついばんだり、珠玉で飾られたりするのは不自然だし、荒廃した宮殿の跡地で凧揚げをするのも考えにくい。さらに、②杜甫詩に「風箏玉柱を吹く」、③司空曙詩に「高風玉柱を吹く」とある「玉柱」、⑥鮑溶詩に「雁柱虚しく勢を連ぬ」とある「雁柱」は、いずれもいわゆる「琴柱（ことじ）」を指すものと解するのが自然である。[九] ④劉禹錫詩に「指爪の声に肖（に）ず」（指爪で弾くのとは一風異なる絃の音をいうのであろう）とあり、⑥鮑溶詩に「彩弦指に触るるに非ずして、錦瑟忽ち風を聞く」とあり、⑧高駢詩に「夜静かにして弦声碧空に響く」と見える「弦」の音は、いずれも「凧」の糸が風で鳴る音と取るより、弦が張られた楽器を詠ったものと見るのが自然であろう。⑧⑨の詩のように「夜静か」なる中で凧揚げをするというのもやや不可解である。

如上の例から、「風箏」が「懸掛された箏」を指すことは明らかであると思われる。次いで、「風箏」の語義の変遷をたどるため、まずはこれらの詩に対する後人の注釈や考証の論述を見ておくことにしよう。

二　杜甫詩の「風箏」に対する後人の解釈

前節に引いた各詩人の作品で、歴代の注釈が最も充実しているのは、言うまでもなく李白と杜甫のものである。

ここでは、杜甫詩に対する注解として最も早い時期のものである、南宋の郭知達による『九家集注杜詩』巻十七（淳熙八年（1181）自序）、および黄希原本・黄鶴補注の『補注杜詩』巻十七（宝慶二年（1226）序）の記述を見てみよう。

①『九家集注杜詩』

風箏、謂製箏挂之風際、風至則鳴也。…（中略）…風箏今内地有之。（風箏は、箏を製して之を風際に挂け、風至れば則ち鳴るを謂ふなり。……風箏は今内地に之有り。）

②『補注杜詩』

洙曰、風箏、謂掣箏掛之風際、風至則鳴也。（洙曰く、風箏は、箏を掣して之を風際に挂け、風至れば則ち鳴るを謂ふなり。）

いずれも、「風箏」とは箏を風の通る場所に懸掛し風によって鳴るようにしたものだ、と解するものであり、全くの同文である。ただし、『補注杜詩』の方は、「洙曰く」として、この解が「洙」なる人物の説の引用であることを明示している。『補注杜詩』巻頭の「集注杜詩姓氏」に、「太原王氏、名は洙、字は原叔」と記載される通り、ここでいう「洙」は、北宋の王洙（997–1057）を指すと見られる。[10]『宋史』芸文志に、「王洙注杜詩三十六巻」と、その撰にかかる杜甫詩の注釈書が著録されており、『補注杜詩』は恐らくこれを引用したのであろう。一方、『九家集注杜詩』は、原注者である王洙の名を明記せずに、その説だけを掲載したものと考えられる。要するに、杜詩の「風箏」を「懸掛された箏」とする解釈は、北宋代に提出されたものと考えてよい。

次に、『九家集注杜詩』の後段にある「風箏は今内地に之有り」の文言についてであるが、実は上引①の前段部分は、「風箏吹玉柱」句下に付せられたもので、中略以降の後段は、「露井凍銀床」句下に付せられた注である。「露井凍銀床」句下には、まず「銀床」の典拠となる古詩が指摘されており、その後に、「趙云」と冠して、以下、「四句は見る所の景物を写すなり」と置いた後、前節②の引用にある「翠柏深留景、紅梨迥得霜。風箏吹玉柱、露井凍銀床」の四句全体にわたる長文の解説が続く。つまりこの部分は「趙」なる人物の注釈の引用だと考えられ、問題の文はこの一連の解説の一部を成すのである。[11]

この「趙」氏が誰かというと、『九家集注杜詩』自体には明記がないが、『四庫全書総目提要』等にも言う通り、蘇東坡（1037–1101）詩の注釈者としても知られる趙次公、字は彦材を指す。趙次公の生没年は未詳だが、南宋初の晁公武（1105–1180）が編んだ図書目録、『郡斎読書志』巻十七に「趙次公註杜甫詩五十九巻」が著録されているから、蘇軾の後輩で、なおかつ宋南渡（1127）以前に活躍した人物であると考えられる。すなわち、「今内地に之有り」の「今」とは、北宋末期頃を指す可能性が高いのである。[12]

さて、以上の杜詩の注釈に関する考察から、「風箏」を「懸掛された箏」と解し、その風習を現存するものと見なす理解は、北宋末以前のものであることが推定された。次に李白詩に対する注釈を検討してみる。

三　李白詩の「風箏」に対する後人の解釈

李白詩の箋注本として最も古いものは南宋の楊斉賢の『分類補

註李太白詩』であるが、残念ながら「登瓦官閣」詩の「風箏」に対しては注解がない。[一二] この詩の「風箏」の語に注解を加えた最古の例は、恐らく清の王琦の『李太白集注』巻二十一に引く次の一節であろう。

真西山曰、風箏簷鈴、俗呼風馬児。（真西山曰く、風箏は簷鈴、俗に風馬児と呼ぶ。）

「真西山」は、真徳秀（1178–1235）、西山先生と号する。南宋中期の政治家であり、朱熹（1130–1200）の学を信奉した学者としても知られる。「簷鈴」は簷の下の鈴で、風鐸、風鈴の類を指す。真徳秀の伝記類には李白詩の注釈を著したとの記述は見出せず、この解がどこから引かれたものかは未詳である。しかし、王琦の記載を信じるならば、南宋中期には「風箏」を「風鈴」とする解釈が現れていたことになる。

さらに王琦は、この解釈を補強すべく次の文を引く。

楊升菴曰、古人殿閣簷稜間、有風琴・風箏。皆因風成音、自諧宮商。元微之詩、「鳥啄風箏砕珠玉。」高駢有夜聴風箏詩、僧斉己有風琴引、王半山有風琴詩。此乃簷下鉄馬也。今人名紙鳶曰風箏、非也。（楊升菴曰く、古人、殿閣の簷稜の間に、風琴・風箏有り。皆な風に因りて動きて音を成し、自ら宮商に諧ふ。元微之の詩に、「鳥風箏を啄みて珠玉を砕く」と。高駢に夜聴風箏の詩有り。僧斉己に風琴の引有り。王半山に風琴の詩有り。此れ乃ち簷下の鉄馬なり。今人、紙鳶に名づけて風箏と曰ふは、非なり。）

「楊升菴」は、楊慎（1488–1559）、升庵と号する。明代中～後期の政治家・文人で、「雑著一百余種」[一四]とも称される膨大な著作群により知られる。右はその代表作と言うべき随筆、『丹鉛総録』巻二十に収める「風箏詩」なる一条の節録である。[一五] この文によれば、楊氏は、「風箏」は「風琴」と同種のものであり、いずれも風鈴の類を指すと説いている。[一六]

注目されるのは、唐末の詩僧・斉己（863–937）の「風琴引」、北宋の王安石（号は半山）の「風琴」など、「風琴」を題材とした詩の例を挙げて根拠としている点である。ここで、ひとまず視点を転じ、「風箏」と近縁のものとされる「風琴」を詠った詩について検討してみることにしよう。

四　「風琴」の詩

まず唐詩における「風琴」を詠った例を左に掲げる。[一七]

①（前略）…月出石鏡間、松鳴風琴裏。[一八] 得心自虚妙、外物空頽靡。身世如両忘、従君老煙水。（一七八、李白「金門答蘇秀才」）

②風琴[一九]秋払匣、月戸夜開関。栄啓先生楽、姑蘇太守間。伝声千古後、得意一時間。卻怪鍾期耳、唯聴水与山。（四四七、白居易「郡中夜聴李山人弾三楽」）

③春尽雑英歇、夏初芳草深。薫風自南至、吹我池上林。緑蘋散還合、擧鯉跳復沈。新葉有佳色、残鶯猶好音。依然謝家物、

池酌対風琴。[二〇] 慚無康楽作、秉筆思沈吟。境勝才思劣、詩成不称心。（四五九、白居易「首夏南池独酌」）

④至境心為造化功、一枝青竹四弦風。寥寥双耳更深後、如在緱山明月中。（八三六、貫休「風琴」）

⑤挼呉糸、雕楚竹、高託天風払為曲。一一宮商在素空、鸞鳴鳳語翹梧桐。夜深天碧松風多、孤窓寒夢驚流波。愁魂傍枕不肯去、翻疑住処鄰湘娥。熏風声尽金風発、冷泛虚堂韻難歇。常恐聴多耳漸煩、清音不絶知音絶。（八四七、斉己「風琴引」）

①③の詩の「風琴」は、何を指すのかはっきりせず、一般の琴を詠ったものとも受け取れる。また②の「風琴」は、李山人が弾ずるものであるから一般の楽器の琴を指すと見られる。④⑤の「風琴」については、「風箏」（懸掛された箏）に類似した器具を指すと見て間違いないだろう。ただ、④の貫休詩には「一枝の青竹四弦の風」と、竹の本体に四本の絃を張ったものとして、⑤の斉己詩には「呉糸を挼（も）み、楚竹を雕（ほ）る」と、「呉糸」（琴絃の材料となる呉の地で産する精美な糸）と楚の竹で作るものとして描かれるから、桐の胴に七本の絃をもつ本物の楽器の琴とは異なる作りのようである。この点、琴柱を具え珠玉で飾られた「風箏」に比すれば、かなり簡略化されたものと言えようか。

続いて、宋代の詩の例を見てみよう。（配列の順序は「文淵閣四庫全書電子版」の収録順に従う。）

①碧篠珍叢北戸陰、時時天籟著風琴。体中癡黠何須判、一夜甘為洛客吟。（宋庠（しょう）『元憲集』巻十五「宿斎太一宮即事（其五）」）

②君不見、長風寥寥起山林、大木怒□喧万籟。是為天籟来無方、中有知音全衆妙。洛陽琴工誇死桐、斉魯諸儒頌清廟。刻商変羽不得騁、撃手高張空改調。豈如風琴得自然、但令雕虎長清嘯。鏗鏘闡緩連昼夜、已断復続誰能料。不論九奏金石諧、那辨五絃宮徴少。世間俚耳何足聴、幸有楊莠嗑然笑。高堂置酒月如霜、金盤照筵紅爛焼。淵明子賤皆有琴、両君叵惜清樽醮。（劉攽（はん）『彭城集』巻八「次韻和羅著作風琴詩送畢長官」）

③穴竹張弦聳碧空、不労抑按任天風。莫誇有智蔵声足、須信無心触処通。明月夜深飄更遠、間窓人静聴何窮。知音弗辨山兼水、都在洪鈞一噫中。（韋驤（じょう）『錢塘集』巻五「風琴」）

④剡竹紉糸匠意深、泠然終日自成音。吾君方急民財阜、好助薫風入舜琴。（韓維『南陽集』巻十四「曾通直見恵風琴」）

⑤露華月色澹軒庭、風過時同衆籟鳴。誰掛機心在絃索、有絃寧更有全声。（張方平『楽全集』巻三「風琴」）

⑥屋山終日信飄飄、似与幽人破寂寥。為有機心須強聒、直教懸解始声消。

簾幕無風起泬寥、誰悲精鉄任飄飄。随商応角知無意、不待歌成韻已消。

万物能鳴為不平、世間歌哭両営営。君知此物心何欲、自信天機自有声。
風鉄相敲固可鳴、朔兵行夜響行営。如何清世容高臥、飜作幽窓枕上声。
南風屋角響蕭蕭、白日簾垂坐寂寥。愛此宮商有真意、与君傾耳尽今朝。
風来風去豈嘗要、随分鏗鏘与寂寥。不似人間古鍾磬、従来文飾到今朝。
繫身高処本無心、万竅鳴時有玉音。欲作鎮耶為物使、知君能笑不祥金。
疏鉄簷間挂作琴、清風纔到遽成音。伊人欲問無真意、向道従来不博金。（王安石『臨川文集』巻三十一「和崔公度家風琴八首」）

⑦焦枯連夏火、洗濯待秋霖。都邑溝渠浄、郊原黍豆深。流膏侵地軸、晴意動風琴。誰似臣居易、先成喜雨箴。（蘇轍『欒城集』巻十四「次韻朱光庭司諫喜雨」）

⑧不植風琴二十年、僧来為我置斎前。欲教羈思残春夢、吟落浮雲共灑然。（晁説之『景迂生集』巻八「風琴」）

⑨横笛休吹且当撾、幽人夢短不禁茶。風琴不鼓自成曲、雪蘂無香猶是花。瑚璉少時軽子貢、鷦鷯此日慕張華。労生正是南飛雁、秋去春来詎有涯。（趙鼎臣『竹隠畸士集』巻五「次韻張衡父冬夕書事」）

⑩風琴牛笛難度曲、早韭晩菘誰当肉。筆端画餅不得飽、汁少熬鶏渾未熟。…（後略）（李新『跨鼇集』巻四「西軒雑言」）

⑪階前水楽元無譜、簷外風琴不用絃。待喚青奴与黄妳、為君極意作今年。（呂祖謙『東萊集』巻一「夏日」）

⑫淵明有琴本無絃、白傅偏喜聴人弾。不如空中風度曲、随風往来声断続。非宮非商従君聴、不中律呂無虧成。大如角韻来孤城、細似蚓竅蒼蝿声。華亭夜鶴円吭清、顫動長引寒蟬鳴。或疑鳳咮叫霄漢、又恐僊佩雲中行。使具似曲無別調、安得自在声泠泠。蛙喧尚謂勝鼓吹、牛鳴猶以黄鐘称。糸不如竹亦漫語、頼此七竅俱瓏玲。幽人院静新凉生、八風不問来縦横。短簟六尺午睡足、払払神来伝広陵。（楼鑰『玫媿集』巻四「風琴」）

⑬（前略）…絶憐冰筯墮脩簷、撥触風琴響朱箔。一冬温煖憂麦蚕、万事乗除等鳧鶴。…（後略）（許綸『渉斎集』巻三「雪再作山甫約遊雨花臺不遂聞与諸公登鳳凰台次韻送似」）

①から⑩までが北宋の例、⑪以降は南宋の例である。「風琴」が何を指すのかはっきりわかるように描かれている例は少ないが、中でも、唐代の懸掛型のものと同様の楽器を指すことが明らかであるのは、③韋驤（1033–1105）詩と④韓維（1017–1098）詩の例で、それぞれ「竹を穴ち絃を張る」、「竹を剡り糸を紉ふ」の句がある。

一方、楊慎も引用していた⑥の王安石（1021–1086）詩の場合は、明らかに鉄製の楽器を指している。「簾幕風無くして泬寥（晴天）に

起こり、誰か悲しむ精鉄の飄飄に任すを」（其二）、「風鉄相敲て（うて）ば固（もと）より鳴るべし、朔兵夜に行きて行営に響くがごとし」（其四）とあるから、風によって音を立てる鉄製の器具であることは疑いがないし、「疏鉄簷間（えんかん）に挂（か）けて琴と作し、清風纔（わづ）かに到れば遽（には）かに音を成す」（其八）という、些か説明的に過ぎるほどの描写は、真徳秀や楊慎が述べる「風箏」「風琴」の形態と完全に合致する。[二二]

それ以外の詩では「風琴」なるものの形状について余りはっきりとは描かれていない。しかし、⑪の呂祖謙(1137-1181)詩には「絃を用いず」とあり、絃のないものを指すことがわかる。また、⑤の張方平(1007-1091)詩には「有絃寧更有全声」とある。この句は難解であるが、ここにいう「全声」とは、唐・元結の「訂司楽氏」（『次山集』巻十一）に、「況や懸水淙（そう）石の、宮商も合する能はず、律呂も主る能はず、之を変ずれば可ならず、之を会するに由無きをや。此れ全声なり」とあるように、滝の水音や谷川のせせらぎの如き天然の音楽、五声八音を合わせた完美なる音楽のことであり、すなわち①②の詩にいわゆる「天籟」[二三]をいう。したがって、張方平のこの句は、「絃有らば寧（なん）ぞ更に全声有らんや」のように訓じ、「絃があれば妙（たえ）なる天籟を奏でることはできまい」といった意味に取るべき所かと推測される。とすればこの詩にいう「風琴」は無絃の「風鈴」を意味することになりそうである。

以上のように、北宋半ばの同時代において、韋驤・韓維は「四絃の竹琴」を指して用い、王安石（張方平もか？）は「金属製の風鈴」を指して用いており、両種の「風琴」が併存していたことが知られる。そして、南宋に至ると、もはや有絃の「風琴」は詩句に登場せず、「風琴」と言えばもっぱら風鈴を指すようになったと見られるのである。

五　「風箏」のその後

一方の「風箏」の方はどうか。第一節では、唐詩の用例はいずれも「懸掛された箏」を指したものであること、第二節では、北宋期に至っても、杜甫詩に対する注釈者は、「風箏」は「懸掛された箏」で、なお現存すると見ていたこと、第三節では、南宋中期の真徳秀、明の楊慎らは「風箏」を風鈴と解していたこと、をそれぞれ確認した。では、どの時点まで「懸掛された箏」としての「風箏」の風習は残存していたのだろうか。また、「凧」を指す用法は何時ごろ登場したのであろうか。次にこれらの問題について考えてみよう。

まず、『四庫全書』集部、別集類所収の宋代の人々の個人文集から「風箏」の用例を拾ってみる。

①白蘋洲暖春風生、画楼檻上銀箏鳴。鏗鏘節奏急復慢、空中一部天楽声。三十六宮深窈窕、綉楣藻井光相照。十三絃上千般声、朝靄微吟暮烟嘯。夜来親向月中聞、繁音錯節何紛紜。砕如鸞鈴与珂珮、巫山隊仗迎湘君。晩来金屋愁微雨、風細箏声不全挙。依稀嬪妄怕人知、啾啾切切私相語。洪纎断続何所拘、鳳凰著対飛鸞孤。梧桐枝辺泊未穏、琅玕島上鳴相呼。有時方

奏俄中絶、宮商斗頓如刀截。杏花露重鴛鴦寒、空見如霜満庭月。有時半日全無風、一一暮天楼閣紅。惟聞鳥雀啄絃上、暖珠寒玉何玲瓏。清音朝朝与暮暮、誤声不管周郎顧。秖嫌雅鄭交奏時、宝鐸丁冬闇相妬。（田錫『咸平集』巻十八「風箏歌」）

②槁葉驚秋樹幄稀、嘶蟬猶尚警寒枝。玉琴可要伝深恨、珠露何妨剰薦饑。已伴風箏流遠韻、更邀霜籟散余悲。清漳病枕無悰久、月夕煩君住少時。（胡宿『文恭集』巻四「寒蟬」）

③憶昔叨塵寓帝京、春光淡蕩値清明。賜来新火伝紅蠟、煮就香糜和白餳。遊女踏青尋苑草、戯童引線送風箏。沙陽寂寞都無此、卧看山雲聴水声。（李綱『梁谿集』巻八「清明日」）

④春禽遭凍息交交、不及風箏迭遞敲。睡起依然開白屋、客来仍是俯青郊。方兄無勢寧能熱、窮鬼多羞祇自苞。載酒刲羊煩厚意、当年莘野尚烹庖。（胡寅『斐然集』巻五「李簿携具用前韻和之」）

⑤（前略）…古兕称春酒、霊虬換夕香。風箏猶有韻、星弁忽分行。念此鋤榛壟、頻来渡葦航。欲揮終極涙、只廃苦吟章。…（後略）（周文璞『方泉詩集』巻二「十月過鳳山舟回入項王祠用前韻」）

⑥段橋牽紙鷂、児戯亦関心。風快応難挽、雲高径欲侵。人誇無限力、身直不多金。説与須知道、明朝不似今。（杜範『清献集』巻二「戯賦段橋風箏」）

⑦破悶孤斟莫厭深、風箏時為送清音。平生遇境無余恋、令節因君忽愴心。梅角吹残愁不寐、柳枝放去杳難尋。蛾眉列屋功成後、未用凄涼学越吟。（程公許『滄洲塵缶編』巻九「和馮潔已節夜見過二首（其二）」）

⑧竹君為骨楮君身、学得飛鳶羽様軽。出手能施千丈縷、挙頭可問九霄程。高窮寥曠寧無力、少仮扶揺即有声。所惜崢嶸能幾日、児曹儚指已清明。（李曾伯『可斎雑藁』巻二十九「因賦風箏与黄郎偶」）

⑨間思十八年前、依稀正是公年紀。銅駝陌上、烏衣巷口、臣清如水、是処風箏、満城昼錦、児郎偉偉、但幅巾藜杖、低垂白鬢、甪与綺、問何里。…（後略）（劉辰翁『須渓集』巻九「水龍吟」）

以下は『四庫全書』別集類ではなく総集類に所収の宋代の作品。

⑩幽禽迎曙響、佳木含春栄。独有綺窓婦、耿耿万里情。塵色皓鴛幌、日華明風箏。高蓋久不返、中宵自懐貞。（明・釈正勉・性通編『古今禅藻集』巻八「宋」所収、慧崇「擬古」）

⑫薄薄羅衣乍暖、紅入酒痕潮面。絮花舞倦帯嬌眼。昨夜平堤水浅。故人信断風箏線。誤帰燕。夢魂不怕山路遠。無奈棋声隔院。（清・朱彝尊編『詞綜』巻二十八「元詞」所収、王従叔「秋蕊香」）

また、『四庫全書』に収録されていないものとして次の作が見出せる。

⑬秋風一撃入雲端、合国人皆仰面観。好向丹霄休索線、等閑勢断却収難。（邵雍『邵堯夫先生詩全集』巻三「呈富相風箏」）

まず①北宋の田錫（940–1003）の詩には、「画楼檻上に銀箏鳴る」、「十三絃上千般の声」とあり、末尾には「宝鐸丁冬闇に相ひ妬む」とあるから、この「風箏」は、「檻上」（楼閣の手すりの上、すなわち

檐の下)に設置される、十三本の絃を具え、風鐸に妬まれる(つまり風鐸とは別種の)楽器を指すことが明白である。

その他の例で楽器を詠った可能性があるのは、②胡宿(995–1067)詩の「已に風箏に伴ひて遠韻を流す」、⑤周文璞(生没年未詳)[二四]詩の「風箏猶ほ韻有り」、⑦程公許(?–1251)詩の「風箏時に為に清音を送る」等の句である。ただし、これらの例には、「音を出す」という表現はあるものの、どのような形状のものを指すのか、有絃のものか否か、そもそも楽器と見なしてよいのか否か、といった点については判然としない。

一方、⑬北宋の道学者として知られる邵雍(1011–1077)詩の「秋風一たび撃ちて雲端に入り、合国人皆な面を仰ぎて観る」、③北宋に生まれ南宋の宰相となった李綱(1085–1140)詩の「戯童線を引きて風箏を送る」、⑥南宋・理宗の右丞相を務めた杜範(1182–1245)詩の「段橋に紙鷂を牽けば、児戯も亦た関心す。風快くして応に挽き難かるべし、雲高くして径ちに侵さんと欲す」、⑧李曾伯(1198–?)詩の「竹君骨為り楮君(紙)身たり、飛鳶に学び得て羽様に軽し。手を出して能く施す千丈の縷、頭を挙げて問ふべし九霄の程」、⑫王従叔(生没年未詳)[二五]詞の「故人信に風箏の線を断つ」等の句は、いずれも竹と紙を用いて造り、糸(線)を引いて空に揚げる「凧」を詠ったものと読み取ることができる。

右のうち「凧」を「風箏」と呼ぶ最も古い例は邵雍の詩であるが、詩詞以外の例で「凧」を「風箏」と称するものに、北宋の高承(生没年未詳)『事物紀原』巻八「紙鳶」条の「俗謂之風箏(俗に之を風箏と謂ふ)」なる記載がある。この書の原型は元豊期の著作とされるから[二六]、この記事が原著者の文であるとすれば、邵雍の詩とほぼ同時代の資料ということになる。では、「凧」を「風箏」の呼称で呼ぶ習慣は、この北宋の時期に起こったと見てよいのであろうか。

再び「文淵閣四庫全書電子版」を使用して検索してみると、実は唐代の用例と思われるものとして、次の用例が検出される。

長大漢放風箏。(長大漢、風箏を放つ。)

これは、晩唐の李商隠(812–858)の作とされる『義山雑纂』(明・陶宗儀編『説郛』巻七十六所収)の「時人漸顛狂」の条に、「無故讐妬他人(理由もなく他人を恨む)」「酒後呼鬼神(酔っぱらって鬼神を呼ぶ)」といった条と並べて、当時流行の一連の「顛狂(もの狂い)」なる事象を列挙した中の一つであり、「いい歳をした男が凧揚げをする」といった意味になるだろう。なお、凧を「揚げる」行為を「放」という動詞で表現するのは、「春風卻放紙為鳶(春風卻つて紙を放ちて鳶と為す)」(『全唐詩』七〇八、徐夤「渓隠」)、「添糸放紙鳶(糸を添へ紙鳶を放つ)」(『全唐詩』七一九、路徳延「小児詩」)などの例がある[二七]。これによれば、唐末期にはすでに「凧」を「風箏」と呼ぶ習慣が発生していたと見ることができるのである。

おわりに

以上から明らかになったことを踏まえて、「風箏」「風琴」の風

習と語義の変遷について簡単にまとめておこう。

箏を懸掛する「風箏」の風習は、唐代には広く行われ、海を越えて日本にまで伝播した。その風習は趙次公の生存した北宋末期までは存続する。一方、唐末期あたりから「凧」を「風箏」と呼ぶ習慣も広まり、北宋期には「凧」の「風箏」と「懸掛した箏」の「風箏」とが併存する状況となったが、北宋末期以降は、「懸掛した箏」の「風箏」はしだいに忘れられて行った。竹と糸で作る「風琴」の風習も唐代に行われ、北宋まで存続する。北宋期になると風鈴型の「風琴」も登場し、両者が併存する状況となるが、前者はやはり北宋末以降しだいに忘れられて行った。南宋中期になり、有絃の「風箏」「風琴」が忘れ去られるとともに、当時行われていた風鈴型の「風琴」と唐詩に詠われる所の「風箏」とが混同されるようになった。以後、一般には「風箏」はもっぱら「凧」を指す言葉となり、「凧」ではない「風箏」の存在に関する知識は、知識人の世界には存続するものの、それは「風鈴」と誤解されたままに止まり、「懸掛された箏」としての「風箏」の記憶はついに失われてしまったのである。(二八)

最後に、「凧」が何故「風箏」と呼ばれるようになったのかの問題について簡単に補足しておきたい。

明・郎瑛(1487–1566)の『七修類稿』巻二十二「紙鳶」の条に次のようにある。

俗に鷂子と曰ふ者は、鷂(はいたか)は乃ち鳥を撃ち、飛ぶこと太(はなは)だしくは高からざれば、今の紙鳶の起たざる者に擬す。風箏と曰ふ者は、乃ち古の殿閣の簷鈴のみ。借りて以て今の絃を帯ぶるの紙鳶に名づくるなり。各々意義有り。風箏・風琴は、丹鉛総論に之を弁じて明かなり。

これによれば、余り高く揚がらない凧を「鷂子」といい、絃を装着した凧を、「軒端の風鈴」を指す言葉を借りて「風箏」と呼んだのだという。また、徐応秋(?–1621)『玉芝堂談薈(かい)』巻二十八「風琴」の条は、楊慎『丹鉛総録』巻二十「風箏詩」条をほぼ襲っているが、末尾の部分をやや変え、次のように云う。(二九)

今、紙鳶に名づけて風箏と曰ふは、蓋し、鳶の上に糸鞭有り、風に因つて韻を成すが故に名づく。其の糸鞭無き者は、箏と名づくるを得ざるなり。

楊慎は、単に「紙鳶に名づけて風箏と曰ふは、非なり」と云うのみであったが、徐氏によれば、本来、風を受けて音を鳴らす撚(よ)り糸、いわゆる「うなり」を取り付けた紙鳶こそが「風箏」なのであり、付いていないものを「風箏」とは呼べない、と言うのである。以上は鳴絃を付けた凧を「風箏」と呼んだとする例だが、一方、次の如く説くものもある。

〔風箏〕即ち紙鳶。又た風鳶と名づく。初め五代漢の李鄴(ぎょう)、宮中に於て紙鳶を作り、線を引き風に乗じて戯を為す。後、鳶の首に於て竹を以て笛と為し、風をして入りて声を作すこと箏の鳴るが如くならしむ。俗に風箏と呼ぶ。(明・陳沂(きじゅん)『詢(すう)芻録』)

紙鳶、俗に鷂子と呼ぶ。春晴に競ひて川原に放ち、遠近、百糸を揺曳す。晩に或は燈を線腰に繋ぎ、連三接五、鷂燈と曰ふ。又た竹蘆を以て簧(リード)を黏り、鷂子の背に縛り、風に因りて播響し、鷂鞭と曰ふ。(清・顧禄『清嘉録』巻三「放断鷂」の条)

これらによれば、鳥型の凧の背や頭に笛を取り付けたものがあり、それを「風箏」と呼んだという。さながらハトに付ける「鴿哨」を思わせるものがある。また、左の資料のように、凧の上に取り付ける響鳴器は「風琴」とも呼ばれたらしい。(三〇)

児童の玩好も亦た時令に関する有り。京師の十月以後、則ち風箏・毽児(蹴羽子)等の物有り。風箏は即ち紙鳶、竹を縛りて骨と為し、紙を以て之に糊り、制して仙鶴・孔雀・沙雁・飛虎の類を成し、画を絵くこと極めて工なり。児童之を空中に放ち、最も能く清目す。風琴・鑼鼓を帯ぶる者有り、更に抑揚聴くべし。故に之を風箏と謂ふなり。(清・富察敦崇『燕京歳時記』「風箏・毽児・琉璃喇叭・咘咘噔・太平鼓・空鐘」の条)

さて、以上に見る所、どうやらこれらの呼称には混乱があるようで、些かわかりにくい。思うに、凧を「風箏」と称するについては、「箏」の字を付する以上、やはり鳴絃を具えたものが本来の姿なのではないかと思われる。

想像も交えて事の次第を辿ってみるならば、――まず、唐代末期頃、「うなり」を付けた凧が、「檐下の箏」に擬えて「風箏」と呼ばれるようになった。竹に絃を張って作る「風琴」に擬えて、この「風箏」に張られた糸は「風琴」と呼ばれたのかも知れない。やがて、明の頃までには、笛を付けた凧も現れ、音が鳴るという共通点から、これも「風箏」と呼ばれた。人々はこの笛を、凧に付けられた音を出す器具という意味で、やはり「風琴」と称したのであろう。(三一)一方、やはり明代頃から、「風箏」の呼称の由来が忘れられるとともに、音を立てる仕掛けを具えない普通の凧も「風箏」と呼ばれるようになり、以後、今日にかけて凧一般を指す語として「風箏」が定着して行った。――というような経緯なのではなかろうか。

《注》

(一)この句の「風箏」を「風鈴」と解するものには、鈴木虎雄訳『杜少陵集(上)』(国民文庫刊行会「続国訳漢文大成」一九二八年)、目加田誠訳『唐詩選』(明治書院「新釈漢文大系」一九六四年)、斎藤晌訳『唐詩選(上)』(集英社「漢志大系」一九六四年)、高木正一訳『唐詩選(下)』(朝日新聞社「中国古典選」一九七八年)などがある。また、「懸掛された箏」と解するものには、吉川幸次郎『杜甫詩注(第二冊)』(筑摩書房、一九七九年)などがある。どちらとも判別しかねるものに釈清潭訳『唐詩選』(国民文庫刊行会「国訳漢文大成」一九三九年)があり、「風箏は簷鈴を言ふ。箏を制し、之を風際に挂く、風至るときは鳴り、殿閣檐稜の間に其音を聞く」と注する。なお、前野直彬訳『唐詩選(中)』(岩

波文庫、改訂版二〇〇〇年）はいずれの解も取らず、「風が琴のしらべのような音をたてて吹く」と解する。

（二）なお、唐詩を詠題別に分類集成した『唐詩類苑』（張之象編）やそれに基づく『唐詩分類大辞典』（四川辞書出版社、一九九二年）には、巧芸の部に「弾棋」（おはじき風の遊戯）や「打毬」（ポロ風の競技）と並んで「風箏」の項目が設けられている（問題の杜甫詩はここに収められていないが）から、これらの書の編者は「風箏」を「凧」と解したのに違いない。その他、例えば節句の凧揚げの行事に関するエッセイの類で、風箏に言及する際に「風箏」を詠った唐詩を引用する例などは枚挙に遑がない。つまり唐詩の「風箏」を「凧」と解する俗説も行われていないわけでは決してない。

（三）中安氏の論をも踏まえ、唐詩に現れる「風箏」を「懸掛された箏」と見る論考として、謝瑾「風箏：中国歴史上的楽器」（『黄鐘（武漢音楽学院報）』二〇〇四年第三期）、張洪安「唐詩中〝風箏〟考釈」（『濮陽職業技術学院学報』第二五巻第三期、二〇一二年）がある。ただしいずれの論考も「風箏」の絃楽器たることを証するのが主で、「風箏」の風習がどの時期まで存続したか、いかにして「凧」を指す語に転じて行ったか等について十分明確にされているとは言えない。

（四）『全唐詩』では、同文の詩が巻一八〇の李白の巻の他に、巻七七六に李賓の作として重複収録される。

（五）吉川幸次郎・小川環樹編『唐詩選（下）』（筑摩書房「ちくま学芸文庫」一九九四年〈もと筑摩叢書、一九七三年〉）二一五頁では、この詩の「風箏」を「風鐸」と訳する。

（六）川合康三選訳『李商隠詩選』（岩波文庫、二〇〇八年）二七四頁では、この詩の「風箏」を「のきばの風鈴」と訳する。

（七）「文淵閣四庫全書電子版」（迪志文化出版有限公司）を使用した検索による。また、台湾故宮博物院、陳郁夫氏によるデータベース「故宮【寒泉】古典文献全文検索資料庫」、および台湾元智大学、羅鳳珠氏らによるデータベース「新詩改罷自長吟―全唐詩検索系統」を使用した検索によっても同様の結果を得る。

（八）なお、唐代において「凧」を意味する言葉としては、「紙鳶」が最も一般的である。例えば、元稹「有鳥二十章」詩の「有鳥有鳥群紙鳶、因風仮勢童子牽。去地漸高人眼乱、世人為爾羽毛全。風吹縄断童子走、余勢尚存猶在天。愁爾一朝還到地、落在深泥誰復憐」など。

（九）「玉柱」は、江淹「別賦」（『文選』巻十六）に「掩金觴而誰御、横玉柱而霑軾。」とあり、李善注に「論曰、鼓琴者於絃設柱、然琴有柱、以玉為之。」と云う。「雁柱」は、路徳延「孩児詩」（『太平広記』巻一七五「路徳延」条所引）に「簾払魚鉤動、箏推雁柱偏。」とある。

（一〇）ただし、『宋史』の王洙の本伝には「字は原叔、応天宋城の人」とあり、応天府宋城は現在の河南省商丘市に当たるから、この

点、「集注杜詩姓氏」の「太原（山西省）の王氏」という記載と合致しない。

（一一）「露井凍銀床」句下の注の全文を掲げれば以下の通り。

古詩、「後園鑿井銀作床、金瓶素綆汲寒漿。」趙云、四句写所見之景物也。翠柏、在冬其実与葉皆翠。左九嬪松柏賦云、「列翠実之離離」、魏収庭柏詩云、「陵寒翠不奪」、是矣。紅梨、言梨葉得霜而紅也。梁庾肩吾尋周処士詩云、「梨紅大谷晩、桂白小山秋。」逈、遠也。深与逈、則柏梨皆非一株矣。風箏、今内地有之。玉柱字、使柳惲七夕詩、「秋風吹玉柱。」又参使袁淑正情賦曰、「陳玉柱之鳴箏。」露井、露地之井也。湯僧済詩、「昔日倡家女、挿花露井辺。」銀床字、旧注引古、雖是而非。銀床両字所出、蓋如庾肩吾侍讌九日詩、「銀床落井桐。」庾丹秋閨云、「空汲銀床井。」

（一二）北宋末の記述であるか南宋期の記述であるかによって「内地」の指す範囲に違いが生じる。南宋期に「内地」と云う場合には、北方の金国の勢力圏を含めない場合が多いようである。なお、前掲中安論文では、この「今、内地にこれ有り」の注記に基いて「十二世紀末当時にもこうした荘厳が存在していたことがよみとれる」とするが、趙次公の発言だとすれば、証言の時点は六～七十年ほど遡らせて考える必要があるだろう。

（一三）楊斉賢の生没年は未詳。芳村弘道『唐代の詩人と文獻研究』（朋友書店、二〇〇七年）第三部、第一章「元版系統の『分類補註李太白詩』では、『分類補註李太白詩』の成書年代を嘉定十四年（1221）から十年間ごろと考証する。なお、注解を施さないのは、楊斉賢にとって「風箏」が未知のものでなかったからだという可能性もあろう。

（一四）『明史』巻一九二、楊慎伝。

（一五）原拠の『丹鉛総録』巻二十「風箏詩」条の全文は以下の通り。

古人殿閣簷稜間、有風琴・風箏、皆因風動成音、自諧宮商。元微之詩、「鳥啄風箏砕珠玉。」高駢有夜聴風箏詩云、「夜静絃声響碧空、宮商信任往来風。依稀似曲纔堪聴、又被風吹別調中。」僧斉己有風琴引云、「按呉糸雕楚竹、高托天風払為曲。一一宮商在素空、鸞鳴鳳語翹梧桐。夜深天碧松風多、孤牕寒夢驚流波。愁魂傍枕不肯去、翻疑住処隣湘娥。薫風声尽金風発、冷泛虚堂韻難歇。常恐聴多耳漸煩、清音不絶知音絶。」王半山有風琴詩云、「風鉄相敲固可鳴、朔兵行夜響行営。如何清世容高枕、翻作幽牕枕上声。」此乃簷下鉄馬也。今名紙鳶曰風箏、亦非也。

（一六）ただし、楊慎の原著の文は前注に示した通りであり、楊氏が「風箏」と「風琴」を区別して論じていた可能性も皆無とは言えない。すなわち、「此れ乃ち簷下の鉄馬なり」は王安石（半山）の詩についてのみ言ったもので、その前に引かれる高駢・斉己詩には及んでいない、と取れないこともない。しかし、元稹・高駢・斉己の引用の後に何の解説も付せずにそのまま王安石の引

用を続け、両者を対比するような書き振りが全く取られていないことからすれば、楊氏はやはり一連の用例がすべて風鈴を指すと見なしていた、と受け取るのが自然だろう。

ちなみに、幸田露伴「日本の遊戯上の飛空の器」（岩波書店『露伴全集』第二十五巻）は、「凧」を論じる中で「風箏」の語に触れ、「風箏は本紙鳶にあらず。殿閣簷稜に設置し、風に因って鳴るものなり。しかれども明の時すでに俗間紙鳶を呼んで風箏となす。清の李笠翁作るところの戯曲の題名の『風箏誤』といへるものは、すなはち真の風箏を指せるにあらず、紙鳶を指して言へるなり。」と云う。なお、寺田透編『露伴随筆集（上）』（岩波文庫、一九九三年）は、右の「真の風箏」の箇所に、「『真の』とあるのは風箏が風鐸、風鈴をさしていう場合を意味するか。」と、不思議な注を付す。

（一七）なお、「南風琴」「薫風琴」「清風琴」など、軒端に懸ける「風琴」ではない普通の琴を詠っていることが明らかな用例については除外した。『礼記』楽記に、「昔者、舜作五弦之琴以歌南風、夔始制楽以賞諸侯。」とあることから、琴を「南風琴」「薫風琴」、さらには単に「風琴」などと呼ぶことがある。

（一八）『李太白集注』巻十九所引の方弘静は「松鳴風琴裏」句を解して「風、松に入りて琴の若きなり」とするが、王琦はこれを駁して「風琴」は山中の地名なりと説く。

（一九）佐久節訳『白楽天詩集（三）』（国民文庫刊行会「続国訳漢文大成」一九二九年）六三五頁では、この句を「秋月の下に匣を開いて琴を奏する」と訳し、岡村繁訳『白詩文集（九）』（明治書院「新釈漢文大系」二〇〇五年）三六四頁では、「古琴を函の中から取り出し」と訳する。

（二〇）前注所掲佐久節訳書四二七頁では、この「風琴」に「簷前の鈴なり」と注する。

（二一）注（三）所掲の張洪安論文は、楊慎の「古人殿閣簷稜間、有風琴・風箏、皆因風動成音、自諧宮商。」の語を引いて、「非常明確地把風琴与風箏界定為両種物品（風琴と風箏を二種類の物品として明確に区分している）」とコメントし、さらに王安石の詩句を引いて、「詩中也是説鉄馬与琴的区別（これらの詩でも風鈴と琴の区別を述べる）」と説明するが、甚だ解し難い。注（一六）を参照。

（二二）「天籟」の語は、『荘子』斉物論に、「子游曰、『地籟則衆竅是已、人籟則比竹是已。敢問天籟。』子綦曰、『夫吹万不同、而使其自己也、咸其自取、怒者其誰邪。』」と見える。

（二三）一九七五年に江西省九江市星子県横塘の宋墓より出土し、整理の上、二〇一二年に出版された。

（二四）周密『斉東野語』巻十三に、南宋理宗の端平年間（1234–1236）の事として周文璞・趙師秀（1170–1220）らが不思議な道人に出遇うエピソードを載せるが、年代が合わない。ただ、周文璞と趙師秀が同時代の人であったことは他の資料から見ても間違い

ない。

(二五)南宋～元の間の人物か。『詞綜』は「元詞」の部にこの作を収めるが、『全宋詞』にも王従叔の作として「昭君怨」等の五首を収める。

(二六)陳振孫『直斎書録解題』巻十に、「事物紀原二十巻　不著名氏。中興書目、『十巻、開封高承撰、元豊中人。凡二百七十事。』今此書多十巻且数百事、当是後人広之耳。」と、原型の十巻本に対して後人の増補が加わっていることを指摘する。

(二七)詩以外の例では、『南史』巻八十、賊臣伝に、「賊之始至、城中才得固守、平蕩之事、期望援軍。既而中外断絶、有羊車児献計、作紙鴉系以長縄、蔵敕於中。簡文出太極殿前、因西北風而放、冀得書達。」とある。

(二八)なお、簷下に懸掛する「風箏」との関連性は薄いが、保管の目的などで箏や琴を懸掛することは後世も行われたようである。例えば、箏に関しては、明末の魏学洙「将雨」詩(清・沈季友撰『檇李詩繫』巻二十二所収)に「忽爾霧霾起、陰風鳴挂箏」とある。琴に関しては、北宋の郭祥正「夜興」詩(『青山集』巻十七)に「目没草堂陰、収書復掛琴。閉門人跡絶、危坐客愁深」とあり、琴の保管法については、南宋・趙希鵠『洞天清録』古琴弁「掛琴」の条に、「湿気を含んだ土壁に密着させないこと」「婦女猫犬の到らぬ場所に掛けること」等々の注意事項を列挙する。

(二九)なお、顧起元(1565-1628)『説略』巻二十三にも、『玉芝堂談薈』と同文の一条を収める。

(三〇)ここに引く『燕京歳時記』の例以外で、凧に響音器の「風琴」を装着することを描くものとして、例えば趙翼『甌北集』巻三十四所収の「美人風箏(其六)」詩に、「五銖衣薄太風流、細骨軽躯称遠遊。挽住尚煩紅線手、倦飛或墜緑珠楼。尚愁高処寒難忍、添箇風琴伝逸響、珊珊恰作珮声幽。」とある。

(三一)『清嘉録』にいう「鷂鞭」も、笛を指して「鞭」というのは奇妙であり、やはりかつては『玉芝堂談薈』にいう「糸鞭」同様、「うなり」(鳴絃)を呼ぶ語だったのが、笛の呼称に転じたものと思われる。

〔付記〕例年、筆者が顧問を務める、本学箏曲部の定期演奏会の案内に、「顧問ご挨拶」と称して箏や琴に関する豆知識的な内容を扱った小文を掲載しているのだが、この数年は「風箏」に関する内容を連載する形となっていた。本稿の内容は、この一連の小文をもとに資料を大幅に補充し加筆したものである。

〈なばた　よしのり／本学教授〉